

イサマラ 異斯夫の履歴

五十猛神の 真相に迫る

三井 淳

⑨

いそたけるのかみ

イサマラについては三國史記に伝が立てられているが(巻四十四、列伝第四)、

墓碑銘程度のお粗末なもので、これよりその人物像を模索するのは困難である。

それでも、三國史記の本紀や他の列伝および日本書紀などを総合すると、わずかながらもその驍將(ぎょうしょう)ぶりが浮き彫りとなる。

生年は不明だが、六世紀早々の智證王(チシヨンワン)の時、于山國(ウサンク)の鬱陵島(ウツリョウ)を攻めてこれを新羅領としていた。この時イサマラはせいせい十代の後半で

あったと思われる。その後五三二年、「南加羅(アリヒシノカラ)」を攻略してこれも新羅のものとした。

「アリヒ」とは古代韓国語で南の意味となり、今の慶尚南道「金海(キメ)」一带を言う。このことについて、日本書紀継体二十三年夏四月(うづき)条に、時に「アリヒシノカラ」に出

兵していた近江毛野臣(おらみのけなおみ)帥(しゅ)いるヤマト軍が、伊叱夫礼智干(いしづれちかんき)のサマラ(麾下(きか)の新羅軍に大敗していることが明記されている。この結果、ヤマト朝廷はほぼその勢力下にあったアリヒシノカラ

を失った。大童(おおわらわ)に奪回

戦を挑んだが、同年七月、河辺臣瓊缶(かわべのおみにえ)の部隊が、大加羅(おおから。慶尚北道高靈(コリヨン)において壊滅、ここに加羅の領地(よこし)は永遠に失われた。この時は新羅軍総大將は、またしてもイサマラなのである。つまりイサマラなるは、六世紀のヤマト朝廷にとり、憎(にく)みも憎(にく)み最大の強敵であった。欽明二十三年は奇しくも新羅眞興王(チンプンワン)の二十三年に当たり、これは西暦で言えば五六二

「任那の官家」とは、今日の慶尚南道から一部慶尚北道に掛けての加羅諸國に おける、ヤマト朝廷の権益を考慮して「さしつかえない。(五十猛歴史研究会會員 驚天動地のヤマト朝廷は、みつあいあつし)

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おすぎ
◇木曜日は内藤博之さんの「ガウデ